

せん孔細菌病（もも）の発生に注意！

1 発生状況と今後の推移

近年、大阪府内のもも産地において、せん孔細菌病の発生が増加している。昨年7月下旬の巡回調査においては、発病葉率（図1：葉の病斑）は22%と過去10年間の同時期の平年値（17%）と比べてやや高かった（図2）。

昨年せん孔細菌病が発生している園地では、今年も発生に注意が必要である。



図1 葉の病斑
(大阪府植物防疫協会提供)

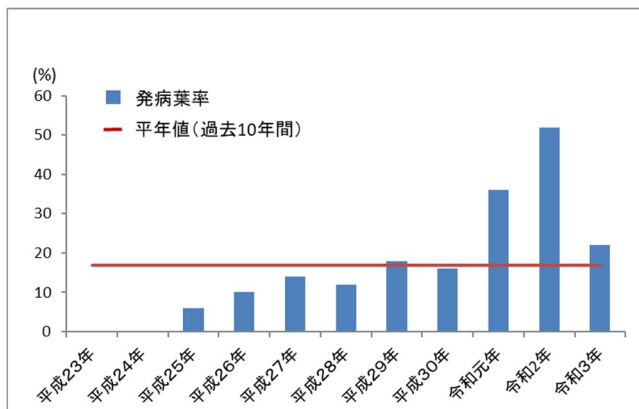


図2 7月下旬の巡回調査における
せん孔細菌病の発病葉率推移

2 生態と感染

- (1) 落葉痕部や枝の組織内にて潜伏状態で越冬する。
- (2) 越冬した病原菌は、春になり気温が上昇すると増殖して春型枝病斑を形成し、その年の伝染源となる。
- (3) 春型枝病斑は、開花期から落花期にかけて結果枝の表面に認められるようになる（図3）。
- (4) 風雨によって病原菌が分散し感染が拡大する。葉や果実の傷口や気孔から病原菌が植物体内に侵入し感染する。
- (5) 病原菌は気温10～35℃で繁殖可能である。25℃前後が最も繁殖しやすい。

《春型枝病斑の特徴》

- ・ 枝が黒ずみ、やがてへこむ。
- ・ 新梢が赤っぽくなる。
- ・ 新梢の伸びが悪い。
- ・ 病斑より先端が枯れることがある。
- ・ 風当たりの強い園地の外周部に発生しやすい。

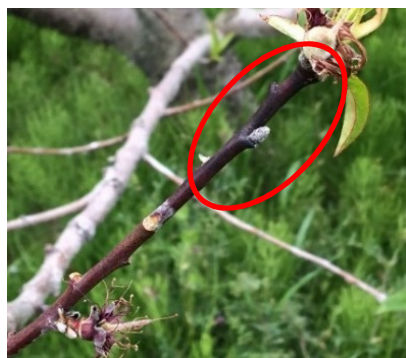


図3 春型枝病斑

3 防除対策

- (1) 枝に形成される病斑の除去は、感染拡大を防ぐうえで非常に重要である。開花後に春型枝病斑を見つけた場合は、早急に健全部を含めて大きめに取り除き、園外で適切に処分する。
- (2) 地域の防除暦や次頁の表1、表2を参考に登録農薬を散布する。生育期の薬剤散布は10日間隔で実施する。降雨前のタイミングで散布すると効果的である。
- (3) 風当たりの強い園地では、防風ネットを設置するなどの対策を行う。
- (4) 収穫後もせん定等で発病部位を取り除き、発病の多い園地では必ず秋期防除を実施する。秋期防除は登録のある無機銅剤等を、できれば9月以降に2週間間隔で計3回散布する。

表1 開花前に使用するせん孔細菌病（もも）に登録のある主な薬剤

薬剤名	成分	FRAC コード	希釈倍数 (使用液量)	使用方法	使用時期	本剤の 使用回数
IC ボルドー412※	銅	M01	30～50 倍	散布	—	—
ムッシュボルドーDF	銅	M01	500 倍		開花前まで	—
カスミンボルドー／ 銅・銅	カスガマイシ ン・銅	24 M01	500 倍		開花前まで	3 回
Z ボルドー	銅	M01	500 倍		収穫後～開花前 まで	—
コサイド3000	銅	M01	1,000 倍		開花前まで	—

※IC ボルドー412は薬害が生じるおそれがあるので、開花後～8 月末までは使用しない。

表2 生育期に使用するせん孔細菌病（もも）に登録のある主な薬剤

薬剤名	成分	FRAC コード	希釈倍数 (使用液量)	使用方法	使用時期	本剤の 使用回数
アグリマイシン-100	オキシテトラ サイクリン・ ストレプトマ イシン	41 25	1,500 倍	散布	収穫60 日前まで	2 回
マイコシールド	オキシテトラ サイクリン	41	1,500～ 3,000 倍		収穫21 日前まで	5 回
バリダシン液剤5	バリダマイシ ン	U18	500 倍		収穫7 日前まで	4 回
チオノックフロアブル／ トレノックスフロアブル	チウラム	M03	500 倍		収穫7 日前まで	5 回
スターナ水和剤	オキシソリニ ック酸	31	1,000 倍		収穫7 日前まで	3 回
マスタピース水和剤	シュードモナ ス ロデシア	—	1,000～ 2,000 倍		前日まで	—

※アグリマイシン-100、マイコシールドは同じ有効成分（オキシテトラサイクリン）が含まれるので、オキシテトラサイクリンの総使用回数に注意する。同一抗生物質の連用は耐性菌の誘発にもつながるので、できるだけ異なる系統の薬剤をローテーション散布することが望ましい。

※薬剤の収穫前日数に注意し、計画的に防除する。

●大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループホームページ

(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農林水産省 農薬登録情報提供システム

(<https://pesticide.maff.go.jp/>)



病害虫防除グループ
ホームページ



農林水産省
ホームページ